

新島のスケッチ

北垣宗治

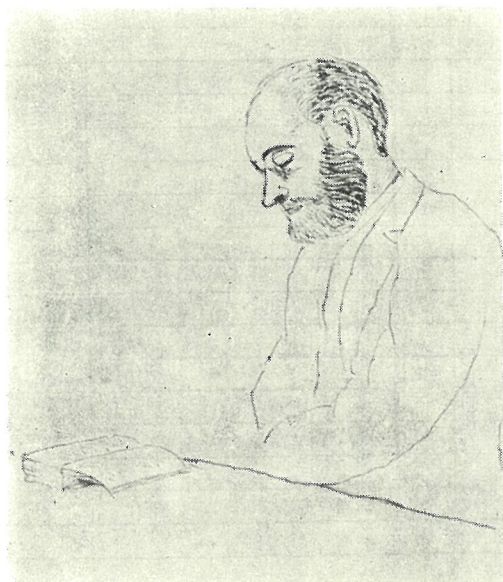
前号所載の島尾永康教授による「新島襄と絵心」に続いて、新島のスケッチの一部を紹介させて頂く。これはすべて第一次外遊の帰途、つまり一八七四年一〇月から一一月にか



第一図

けての英文日誌一冊分の中にあるものばかりである。

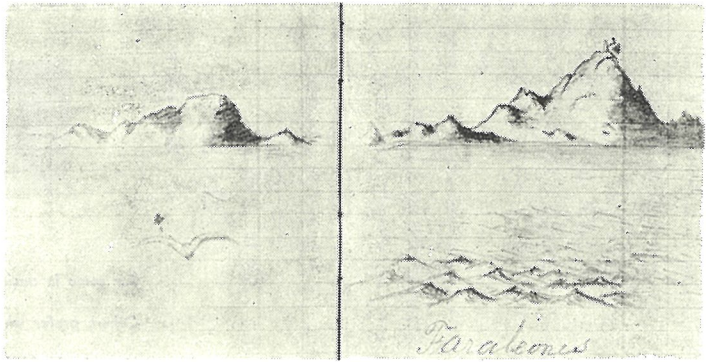
口絵は、アメリカの



第二図

東部でハーディー夫妻や友人たちに別れを告げたあと、サンフランシスコまでの米大陸横断の汽車旅行のつれづれに、新島がネブラスカ州オマハのあたりで試みたインディアンのスケッチ。きわめて写実的なタッチであるが、このインディアンについての新島の説明は見当らない。日記の前後関係から、一〇月二三日のものとして推定される。

第一図は同じくインディアンの女と赤ん坊



第三図

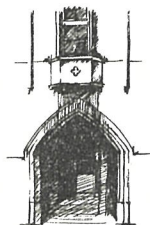
の絵である。インディアンにも子供をおんぶする習慣があるようだが、日本の場合と異って、母と子は背中あわせ、別方向向きである、おんぶ用の板が用いられ、それには子供

の頭を日光（雨？）から守るためのおおいがついている。その珍しさとなつかしさから、新島はこの写生をしたのであろう。写生の場所はネバダ州エルコ(Elko)、写生日は一月二十七日とある。

読書中のヒゲツラの学者（牧師？）のスケッチ（第二図）は日記の後の余白の頁に出てくる。モデル、日付、ともに不明だが、見方によっては居眠りしているようにも見える。

第三図はサンフランシスコの西、約三〇マイルの海上に浮かぶフアラロン諸島(Farallon Islands)のスケッチで、一月三十一日から一月一日ごろの写生。島の山頂には灯台が見え、左手にはカモメが飛んでいる。飛行機の時代である現在では、この島を見る機会はなくなったが、船の時代の旅人にとって、フアラロン諸島は、ついにサンフランシスコに入港するのだという実感をよびおこす島であり、また新島のように、これで米国に別れを告げることになる「やよならの島」なのであった。ただし新島が Paraleones と綴っているのは正確でない。左上の J.B. Blakey が誰を指すのか、これまた不明である。

（大学文学部教授）



87